産業革命の倫理とロマン派の精神

――ワーズワースの行動規範を中心に――

薬師川　虹　一

The Ethic of the Industrial Revolution and the Spirit of the Romantics

---Chiefly concerning Wordsworth's behavioral code---

Koichi YAKUSHIGAWA

Key Words: Ethos, Counter-Ethos, A Figure of a young maid and an old woman.

Synopsis:

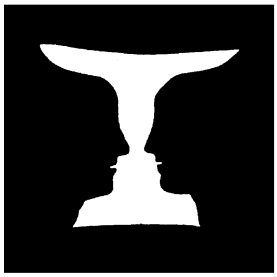
I would like to use "ethos" for a behavioral code under a strong influence of Max Weber's *Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. I will trace in this paper what a romantic ethos is like by looking into Wordsworth's poetics and politics reading through his poems, letters and some prose works, especially *A Guide through the District of the Lakes* and "Essay on Moral".

In the previous paper did I point out a fact that though the Lakes seems to be a fringe district in England, Wordsworth would not stand on fringe but pseudo-centre in his spirit. All starts out of this recognition.

Main attention will be paid to his attitude towards Catholic affairs, because it will show a formation of his ethos under strong bias of his conservative attitude to English history and his contemporary social conditions. Another strong attention will be paid to his *Guide through the District of the Lakes* because I take it for the most important work of all his poetical and prose works showing his fundamental politics clearly.

He seems to try to establish counter-ethos against the prevailing rational and scientific ethos of the Industrial Revolution but for all his intention his ethos could never be a counter-ethos because of his conservative basic politics. To make my intention clearer, I would like to make use of two figures.

Figure 1



古典的な図地反転図形（ルビンの壷）

Figure 2

老婆/若い娘

１　はじめに

前回の中間報告で、イングランドの中の湖水地方と、同じ連合王国にある北アイルランドとの違いに注目して、決定的に周辺であるアイルランドで歌うヒーニーの立場に対し、ワーズワースの立場を擬似周辺と定義した。「階層社会における行動規範の考察」という今回のテーマに進むためにそれは必要な詩人の位置づけであった。そこで今回は一応の結論として、その擬似周辺に位置するワーズワースの行動規範を考えて見なければならない。

今回の報告を私は「産業革命の倫理とロマン派の精神」と題したが、もちろんそれは、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンテイズムの倫理と資本主義の精神』を念頭にしてのことである。今ひとつ、念頭にあるのは、心理学や認識、あるいは、知覚論で使われる、「ルビンの壷」と「若い娘と老婆の図」である。ヴェーバーは資本主義の精神を創造し、それを動かす原動力として、プロテスタンテイズム、とりわけカルビニズムの厳格な倫理規範が大きな役割を果たしたと考えた。働くことをただ利潤追求の行為としてのみ考えるのではなく、神の恩寵に応えるもっとも正しい道であるとする、「天職」という意識、あるいは倫理規範、を宗教とは無縁とみえる経済機構である資本主義を推し進める原動力と考えた。

資本主義と対応する「主義」として、イギリスに果たして「ロマン主義」が存在したかどうかはバイロンの発言を俟つまでもなく疑わしいが、明らかに前の時代とは異なるエートスを持った新しい流れとして、ロマン派詩人たちが存在していたことを疑う余地がないとすれば、彼らを駆り立てた倫理規範の存在を認めることは、それほど荒唐無稽なことではないだろう。事実彼らは倫理規範を求めることにおいてきわめて宗教的であった。人身売買を認める奴隷制度を厳しく批判し、自由と平等の社会を作るためには、今で言う、リベラル・アーツの徹底的な普及が先決だと説くコールリッジの『教会と国家』の土台となったパンテイソクラシーの理念は、同時代の新しい考えであるゴドウイン流の男女平等思想を色濃く持ちながら、根底には、古キリスト教の理念をしっかりと持っているものである。ワーズワースの場合、『湖水地方案内』が示すように、湖水地方の自然環境保護を新しい市民社会、あるいは、資本主義社会、の中核となる新興階層としてのジェントリーの価値規範 (Taste) が正しく成長してくれることに望みをかけていたごとく、マックス・ヴェーバー的資本主義の精神を時代精神として求めていたと言えるだろう。

好むと好まざるとに拘わらず、時代は新しい社会を求めて進んでいた。ロマン派詩人たちも、好むと好まざるとに拘わらず、新しい時代の流れの中に身をおいていた。それは、産業革命の流れであり、市民社会の確立される時代であった。時代のエートスは産業の在り様とともに変わっていった。理性というファンタズムの表象として科学技術が発達し、それに対する拮抗力として空想力、想像力の表象として詩が求められるようになる。

2　ワーズワースの場合

Sweet is the lore which nature brings;
Our meddling intellect
Mis-shapes the beauteous forms of things;
---We murder to dissect.

Enough of science and of art;
Close up these barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.　(“The Tables Turned” 25-32)

と歌うワーズワースはまさに時代の反エートスを示していた。産業革命の精神は、見つめ、受け止める心を失い、ひたすら分析し、奪い取ることに集中していた。大量生産、大量消費、は時代の趨勢であった。流通手段は高速化し、道路網や運河網がイギリスの原野を網のように覆った。人々はひたすら前へ前へと進み、立ち止まることは落ちこぼれることであった。「殺して、分析する」われわれの知性は不毛の学問ではあるが、それでも湖水地方では寺院の廃墟の横を黒煙を上げて蒸気機関車が疾走するのである。ここにはわれわれの周囲に見られる、不毛の高速道路建設の姿が予見されているではないだろうか。「羊飼いと農夫の完璧な共和国」(*A Guide through the District of the Lakes, Prose,* Vol.II, p.206) を湖水地方に見ているワーズワースはこういった時代のエートスを厳しく糾弾し、「自然がもたらしてくれる、甘美な教え」つまり「賢明な受動の心」(wise passiveness) をカウンター・エートスとして持つべきであると主張する。

だがここで注意しなければならないことは、ワーズワースが求めたカウンター・エートスが、時代のエートスと基本的に相容れないものではなく、「ルビンの壷」の黒と白の色が、どちらも図地反転しうるように、エートスとカウンター・エートスとはいつでも反転しあえるものであったということである。あるいは、「若い娘と老婆の図」が教えてくれるように、若い娘、あるいは、ワーズワースのカウンター・エートスは老婆、あるいは、エートスと分かちがたく溶け合っているというべきかも知れない。例えて言えば、二大政党制の下で、与野党はどちらもが、いつでも体制側になりうるということなのである。それはかつてマルクーゼが夢見た「二次元的社会」とは根本的に異なるものであることを理解しておかねばならない。ワーズワースが擬似周辺に立つ詩人であるとした中間報告はその点を指摘したものであった。

こういったワーズワースの世界の仕組みを心得た上で、今一度彼の詩を読んでみれば、彼の言う「賢明な受動の心」というものが極めてヴァーチャルな心であることがわかるだろう。た

とえば；

---He is insensibly subdued
To settled quiet: he is one by whom
All effort seems forgotten, one to whom
Long patience now doth seem a thing, of which
He hath no need. He is by nature led
To peace so perfect, that the young behold
With envy, what the old man hardly feels. (“Old Man Travelling” 7-14)

と歌うのを聞くとき、この詩人はどこに立っているのかという疑問は消え、一人歩む老人とはほとんど無関係な場所に、すなわち、ヴァーチャルな世界に立っていることが明白になる。詩人が表象しようとしているものは、“what the old man hardly feels” であって、詩人の心の中にしか存在しないもの、あの「羊飼いと農夫との完璧な共和国」と共通するものなのであった。それは、語られるもの、あるいは、教えられるもの、ではなく、自ら見出すべきものなのである。この点に関しては、ワーズワースの多くの詩が示していることなのだが、ここでは、“Simon Lee, The Old Huntsman” を取り上げておこう。この詩はあまり取り上げられることもない作品であるが、ワーズワースの行動規範を見るのにきわめて便利な作品といえる。

たとえば、「羊飼いと農夫との完璧な共和国」とはいかなるものかと問えば、ワーズワースはこう答えるだろう：

And I’m afraid that you expect
Some tale will be related.

O reader! Had you in your mind
Such stores as silent thought can bring,
O gentle reader! You would find
A tale in every thing.
What more I have to say is short,
I hope you’ll kindly take it;
It is no tale; but should you think,
Perhaps a tale you’ll make it. (“Simon Lee” 71-80)

これがワーズワースの Politics であり、行動規範なのである。この詩は例によって、バラッドらしく始まる。

In the sweet shire of Cardigan,
Not far from pleasant Ivor-hall,

An old man dwells, a little man,

I've heard he once was tall. ("Simon Lee", 1-4)

そして詩人はその男の容貌、特技、その他様々なことを細々と語る。その挙句、

My gentle reader, I perceive

How patiently you've waited, ("Simon Lee",69-70)

と言って先の引用に至るのである。彼は決して自分を主張しない。解説しない。語ったり、描いたりは決してしないのである。長々と語られるサイモン・リーという男の説明はあくまでもサイモンという人物についての話であって、サイモンについての詩人自身の意見が語られることはない。それでは、わずか 104 行のこの詩の中で、68 行を使って書かれているサイモンについての語りは何の意味も無いのかと言えば、まさにそこに意味があるのである。つまり、サイモンの姿は詩人を含めた当時の人々すべての心の奥底に潜む、ファンタズムの表象であり、その表象によって改めて読者の心の中にファンタズムがかもし出されることを詩人は期待しているのであった。貧しい上に決して頑強な身体の持ち主でもないサイモンは「働けば働くほど、くるぶしの腫れは大きくなる」のである。それでも彼は、衰えた老骨に鞭打って、働いている。その姿に、ロビンソン・クルーソーの姿を重ねることは決して難しいことではない。そしてサイモン・リーの姿は、新しく勃興してくる新興階層、ジェントリーの老いた姿を予想させてくれる。

One summer day I chanced to see

This old man doing all he could

About the root of an old tree,

A stump of rotten wood.

The mattock tottered in his hand;

That at the root of the old tree

He might have worked for ever. ("Simon Lee", 81-88)

よろめく鶴嘴では、いつ果てるとも知れぬ仕事に彼は黙々と取り組んでいる。彼をそこまで駆り立てるものは、ヴェーバーの言うカルビン的「天職」意識以外の何ものでもないだろう。枯れた老木の大きな根っこと、それに取り組む老人とは、まさにプロテスタンテイズムの倫理の表象といえるだろう。だがその何という戯画化された姿であることか。そしてわれわれはその中に、「羊飼いと農民との完璧な共和国」の姿を見ることができるのである。『湖水地方案内』で期待を寄せたジェントリーを詩人は果たして本当に信じていたのだろうか。『案内』の最後に書かれた言葉

数年も経てば、湖水地方周辺の土地はほとんど全てが、この土地の人であれ、以外の人であれ、ジェントリーの所有となるだろう。そこで、より良い価値規範 (a better taste) が

こういう新しい所有者たちの間に行き渡ってくれることを希わねばならない (*A Guide through the District of the Lakes, Prose,* Vol.II, 224)

をわれわれは皮肉な意味にとらねばならないことを悟るのである。

ワーズワースはジェントリーという産業革命の中から生まれてくる、新興階層よりも、彼がステーツマン (statesmen) と呼んでいる田舎の小地主階層の人々 (small independent proprietors of land) に期待を寄せていたことは確かである。

彼らはまともな教育を受け、日々、彼らの所有するわずかな土地で生計を立てている。人ごみにもまれぬ田舎で暮らす人々の仲にこそ家庭の絆は常に強く存在する。・・・彼らのわずかばかりの土地の存在がその人々の家庭という心の絆の結集点となっているのだ (L. Early Years, No.152, 1801, January 14)

という言葉にワーズワースの彼らに寄せる大きな期待が読み取られるだろう。そして彼らの行動様式そのものが、ワーズワースが求めている行動規範であったといっても良いのではなかろうか。たとえわずかであっても自前の土地を所有しているということ、そして、その土地とともに生きているということ、そこに、人間らしい生き方の美学を見出していたのがワーズワースであった。

そこには当然、囲い込まれた土地の中の世界という制約が付きまとう。それはまたクロードグラスという限られた枠組みの中にはめ込まれることによって、今までならば、単なる荒地として見捨てられていたところに、ピクチュアレスクという新しい価値を付加することによって、新しい交換価値を付加することになった、新しい美術の世界と似通っているといえる。従来の枠組みとは異なる、新しい枠組みを求める、すなわち、パラダイムの変更、がワーズワースの行動規範となっていた。だが、「囲い込み運動」が新しい社会構造を生み出し、ピクチュアレスクが新しい美意識を生み出したように、ワーズワースの求めた行動規範が新しい人間像を生み出しえなかったところに、彼の立っていた場所が、擬似周辺であったことの意味がある。確かに彼が描こうとする老人、浮浪者、貧しい女、子供、たちには産業革命と都会化の進展とによって、急速に失われてゆく家族という愛の絆が哀愁を漂わせながら絡み付いている。"Old Cumberland Beggar", "The Thorn", "The Brothers", "Michael" などその例を見る作品は多い。

もちろん、これらの弱い人々を、図地反転の原理によって反転させ、彼らを地としたときに浮き出てくる図としての階層の人々の姿を想像させることが、パストラルの本質だと言うことは可能である。だがそれはあくまでも想像力の世界であり、それでとまるとき、文学は所詮絵空事の営みになってしまうだろう。Poetics が Politics であることをやめたとき、詩は詩のための詩になってしまわねばならない。ワーズワースが『叙情民謡集』を出版したとき、彼は決して詩のための詩を書く詩人を目指していなかったことはその序文にも明らかである。

3　ワーズワースの行動規範

彼は、シェリーのように、世間を変えようとは思っていなかった、むしろ彼は、ともすれば見失われがちな、自らのアイデンティティにてこ入れをしようとしていたのである。「私は読者の心の中に溶け込み、血と混ざり合い、私が求めているような習慣を形成するようにわれわれの意識に価値ある影響を与えるほどの力を持って書かれた道徳哲学の書物を見たことがない」(“Essay on Morals” Prose Vol. I, 103) と彼は「道徳論」と仮に題されている小論文の中で書いている。彼は当時の社会的趨勢の中で、ともすれば過大に評価されている「理性」に拮抗する力として、「習慣」を重視する。

> こういう傲慢で、むくつけき、理性の働きというものはわれわれの習慣に対しては無力である。理性で「習慣」を形成することは出来ない。同様に、理性は人間やさまざまな出来事の価値に関するわれわれの判断を規制する力はない。理性は人間の全体像を持っていない、いや、それは何ものも描くことは出来ないのだ。
>
> (“Essay on Morals” Prose, Vol. I, 103)

そして産業革命が、「理性」を中軸とする科学によって推進されていることはいうまでもない。だがワーズワースが「習慣」という言葉で言い表しているものは、「英国国教会」という枠組みの中で形成されてきたものであった。彼は、「英国国教会」の枠組みに対して忠実な信徒であった。その枠組みの中で形成されてきた、英国的なもの “Englishness” こそ彼の行動規範の中核をなすものであった。イギリスの「自然」に傾倒して行く彼の姿勢は、その意味で、きわめて保守的な姿勢であったといえる。そのことは「ローマ人がブリテン島から撤退したとき、これらの山の砦が征服されざるブリトン人にとって守りとなったことは良く知られていることである」(*A Guide through the District of the Lakes,* 1307-9) と書いているところからも窺うことが出来るだろう。湖水地方で盛んに行われている「植林」作業に対する彼の強い拒否反応も、自然を守る、あるいは保護する、という姿勢の背後に、長年にわたって育てられてきた状態を、外来種から守ろうとする、姿勢がある。産業革命の進展につれて、ますます需要の高まる建設用木材の確保のために、乱伐される湖水地方の森林は、成長の早い外来種の樹木を植林することによって需要に追いつこうとする。それはきわめて合理的な営みであるが、その結果、湖水地方の森林は、多様性を失い、平均化された高さの樹木が、整然と並ぶ、人工的な森林に変貌する。長年に亘って培われてきた習慣によって形成される自然の状況こそが守られるべきものであって、建設資材の供給基地 (“I would utter first a regret, that they should have selected these lovely vales for their vegetable manufactory.” (*A Guide through the District of the Lakes,* 2044-45) としての自然ではないということを『湖水地方案内』は主張するのであるが、それは、「習慣」という、土地や風土に密着した精神から生

まれてくるエートスに対する「合理性」という需要と供給の原理のみから生まれてくる産業革命のエートスの侵略を排除しようとする彼の基本姿勢から来るものであった。そして「習慣」についての L. S. Lockridge の解釈はきわめて有効なものといえる。彼によれば、「習慣」は「緩やかな必然性」と同義に解釈されている (*The Ethics of Romanticism,* 1989, Cambridge U.P. p.209)。習慣が『必然性』へと緩やかに移行するというこの論理にこそ、彼の行動規範が隠されているのではないだろうか。カトリックの開放は、急激な革命に向かう危険性をはらむがゆえに、彼は反対する。すべては『習慣』という自然の摂理の中で、移行しなければならない。この行動規範はそのまま「カトリック開放」運動に対する拒否の姿勢とつながってゆく。

「ウイリアムは徹底的にカトリックに反対です」(L.Vol.3-2, No.305, 1813, Sept.) とドロシーが書いているように、ワーズワースにはローマ教会とカトリックに対する根本的な拒絶反応がある。それはアイルランド問題に対する彼の発言を見るとき明らかである。

> カトリック解放運動は野心的で、不満を抱えている人々の口実に過ぎない。あなたは次の段階として、a Catholic Established Church（体制として認められたカトリック教会）を容認する覚悟がありますか。私ははっきり言って、そういう考えを恐れます」(L.Vol.2-1, No.220,1811,March 27)

ワーズワースはカトリック協会が、「体制として認められること」を恐れているのである。言い換えれば、彼自身が体制側にいることを自覚し、確認しているのである。そして「体制」とは決して政治体制、社会体制のみを指すものではない。それは自然状態にも適応される概念なのであった。この認識は彼のすべての分野における活動、詩作を含めて、の底流となっていることを見落としてはならない。アイルランドの人々に対する認識もこの中に入る。

> アイルランドの状況は現在も、また過去から通じても、忌まわしいものである。残念ながらかの地の人々は総じて無知であり、そのために、酷い妄想や激情にとらわれて、イングランドによって彼らに加えられる抑制がなければ、彼らは互いに破滅させあうことになるのだ。・・・だからイギリス文明はアイルランドの未開状況に対する盾であるということは正しい。・・・アイルランドの悲惨さと無知さについての直近の原因は――ローマ法王権と土地財産の保有権である」(L.Vol.3-1, No.178, 1825, June, 11)

ここには所謂オリエンタリズムという言葉で言い表されることになる、ヨーロッパ至上主義、あるいは、プロテスタンティズム至上主義という姿勢が歴然と見られるであろう。シェリーのいわゆるアイルランドキャンペーンが失敗に終わったのも、彼自身の主観的意図はどうであれ、客観的には彼の中に潜むイギリス至上主義が招いた失敗であったのと同じ状況をここにも見なければならない。この姿勢はワーズワースの社会的弱者 (minority) に対する姿勢にも通じるものであった。そしてイギリスの自然のみ、あるいは、こそ、が

> A termination, and a last retreat,

A Centre, come wheresoe'er you will,
A Whole without dependence or defect,
Made for itself, and happy in itself,
Perfect Contentment, Unity entire. ("Home at Grasmere" 166-170)

なのである。この完璧な世界に入ってくるいかなる異分子も許すことは出来なかった。そしてこの完璧な世界の成員間においてのみ、社会的弱者もその位置が認められるのである。だから「イングランドに今なお残存している封建的権力構造というものは、必然的に革命に向かうことになる大衆の改革指向の傾向を抑制するのに大きく役立っているという意見を持たざるを得ないのである」(L.Vol.3-2, No.523, 1818, Nov. 28) というワーズワースのきわめて体制擁護的思考の枠組みの中で彼の作品は常に読まれねばならないといえる。

「湖水地方の成員が互いに自然に浸透しあい、個的特性を形成する境界線は消えてゆくという精妙な移行」(*A Guide through the District of the Lakes,*1798-99) という現象はこの枠内に限られていることを忘れてはならない。『習慣』を『緩やかな必然性』に移行させる論理がここにある。そして『羊飼いと農民による完璧な共和国』はまさにその究極の姿であり、その共和国ではすべての身分や階層の違いは解消される。ワーズワースの作品に登場するすべての弱者は、この限られた理想的共同体の成員であるという前提で、共感され、詩人の心と通い合っているのである。従って、カンバーランドの乞食や蛭取りの老人には共感しても、アイルランドの人々に対しては、そういう共感はなく、単なる無知蒙昧の徒として切り捨てられるのである。ここに擬似周辺に立つ詩人としての彼の特異性があると見なければならない。

4　終わりに

ワーズワースは確かに科学や、理性至上主義的思考や行動に反対した。その点で彼は明らかに時代のエートスに対して、カウンター・エートスの形成を主張したといえる。理性に対する「感性」や「習慣」の復権を歌う彼の作品は、そういうエートスの表象と見ることはできる。だがここで注意しなければならないことは、時代のエートスと彼が求めるカウンター・エートスとは、あの「若い娘と老婆の図」のように分かちがたく溶け合っているということである。ワーズワースの場合、ルビンの壷は破綻する。図地反転の原理だけでは、彼の世界は理解できないことを知らねばならない。

言い換えれば、彼の場合、産業革命の倫理とロマン派の精神とは分かちがたく溶け合っているのであって、決して彼は時代の流れに逆らっている詩人ではなかった。ということは、ロビンソン・クルーソーの行動規範とワーズワースのそれとは、分かちがたく溶け合っているということである。湖水地方は決してロンドンと対立する世界ではなく、むしろ擬似中心ないしは

周辺として相互補完的に共存している世界なのであった。

このことは、詩人の作品だけを見るのではなく、詩人の立つ場所を考えることから導き出されてくるものではないだろうか。従来ともすれば、都会対田園という、単純な二項対立の図式に載って読まれていたロマン派詩人たちの世界を「行動規範」を考えるという新しいパラダイムの中で考えてみた。

この行動規範はワーズワースのみならず、他の詩人たちにも当てはまりうるものである。おそらく、バイロンは、唯一の例外となるであろうが、この問題は別の機会に考えねばならない問題である。

終

主要参考図書

English Historical Documents, Vols. X, XI, XII, (Eyre & Spottiswoode, 1969)

The Poetical Works of Wordsworth (Cambridge Editions, Ed, P.D.Sheats, 1982)

Gill, Stephen ed.: *William Wordsworth* (Oxford Authors, Oxford University Press, 1990)

Owen, W.J.B. & Smyser J.W. ed.: *The Prose Works of William Wordsworth,* 3 Vols. (Oxford at The Clarendon Press, 1974)

Selincourt Ernest De, ed.: *The Letters of William and Dorothy Wordsworth,* 8 vols. (Oxford University Press, 1967-1993)

Vidler, Alec R.: *The Church in an Age of Revolution* (The Penguin History of the Church, 5, Penguin Books, 1991)

Liu, Alan: *Wordsworth, The Sense of History* (Stanford University Press, 1989)

Gilpin, George H. ed.: *Critical Essays on William Wordsworth* (G.K.Hall & Co. 1990)

Weber, Max.: 『プロテスタンテイズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫)

本稿は平成14年度—15年度日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究 (c)(2) 研究課題番号 14510549）による研究の報告である。